

## 第8講：「元の理」と「こふき」

従来の「こふき」本の研究は、特定の写本の書誌的研究や写本の交合、さらには写本の系統や原本を確定するための基礎的な調査を中心としてきた。しかし、初期の書誌的研究を踏まえて体系的な解釈や通訳が試みられてきた原典研究とは違って、こふき本の構造的な読解はほとんどなされていない。

写本の系統や原本を確定する基礎的な研究も不十分な段階ではあるが、今回の講座では、発表者が大学の演習や研究会等で何度も原本を通読してきた、天理図書館所蔵の「神の古記」（明治16年写本）をもとに、写本の原本にさかのぼりながらこふき本の世界の一端を紹介し、天理教教理における「元の理」の位置づけについて考えてみた。

＊

いわゆるこふきの写本については、すでに中山正善『こふきの研究』においてその概略が示され、明治14年と16年の写本の翻刻が紹介されている。また、『復元』誌に掲載された、吉川万寿雄「神の古記対照考」（『復元』第15号）は、明治16年の榊井本などを標準本として、各種のこふき話の写本を比較検討しているが、別席台本のように整理された定本ではない。上記の吉川氏の遺稿を掲載するにあたって、編集者は「内容についての釋義は、そのうちに書いてみたいと思つてゐる」と述べている。しかし、これらの書誌的な研究はいまだその途上であり、確定された定本をもとにこふき話の概要をまとめ、内容の解説や細部の表現の解釈を試みるのは、まだしばらく先のことになるだろう。

とはいえ、こふき本のヴァリエーションは細部の表現などの差異が主であって、全体的な話のプロットや構成に極端な違いは見られない。とくに明治16年本以降の写本に関しては、ある程度の概要をまとめて、こふき話の全体的なイメージを掴むことは可能であろう。

今回の発表では、天理図書館所蔵の「神の古記」（明治16年写本）をもとにして、写本として残されたこふき話の概略について解説した。もちろん、この写本は定本ではなく多様な写本の1つに過ぎないが、教祖ご在世当時の教えの説き分けの一端に触れ、教祖を通して伝えられた親神の教えに近づく機会にしたいと考えた。

この写本に関しては、すでに上野利夫氏による翻刻が『ビブリア』第43号（1969）に掲載されている。上野氏によると作者は不詳であるが、「交合資料として注目すべき価値あるもの」であることは確かなようだ（112頁）。「神最初之由来」、「神之古記」、「彼岸之訳」、「甘露台一条」からなるこの資料のうち、「神最初之由来」と「神之古記」が、いわゆるこふき本にあたる。当日は、原本の写真を投影しながらこふき話の内容と構成を紹介し、教祖のお言葉をより身近に感じられるように心がけた。

くずし字で記されたこの時期の直筆資料は、読み慣れるまでに時間がかかる。しかし、その一方で活字化された資料よ

り以上に、その筆致などから当時の人々の教理理解を推量し、教祖のお言葉をより身近に感じることができよう。

こふきの写本は、とても丁寧に書写されている場合が多く、決して読みにくい資料ではない。こふきに関心をもつ人々に、もう一步踏み込んだ研究の世界に触れていただくよい機会になったと思う。

＊

また、本資料はしばしば「前の部」や「この訳左に」といった表記を使用し、全体をいくつかのセクションに分けている。なかでも、いわゆる「泥海古記」と称された元はじまりの話のセクションは、こふき本の主要な部分ではあるが、この創世の説話はこふきと称された教説のすべてではなく、むしろ「かしまの・かりもの」や「ほこり」、「陽気ぐらし」といった教理をより説得力のあるかたちで説明するために、説かれているような構造になっている。元はじまりの話に説かれる人間・世界の創造と、あらゆる生命を育む親神の守護を前提として、はじめて「かしまの・かりもの」や「ほこり」、「陽気ぐらし」といった教えは、具体的にひとり一人の運命を転換し、世界をあるべき姿に変えていく原動力となりえるのである。

とくに「前の部」と称される立教の経緯との関連性に目を向けるとき、「こふき話」は創世説話というよりは、立教の意義と教祖の立場を明確にし、救済の手段としての「かぐらづとめ」の意義をより具体的に説いていることは明らかだろう。こふき本の原本と向き合いながら、その内容を検討するとき、誰もが同じような印象を受けるのではないだろうか。

当日は、天理図書館所蔵「神の古記」（明治16年写本）の基本的なプロットと構成を原文に即して紹介しながら、いわゆる「こふき本」の概要を解説して、「こふき話」＝「元はじまりの話」ではなく、かなり広い範囲の教説がそこに説かれていることを具体的に説明した。

＊

教祖が取次ぎに仕込まれたこふき話の全体像を俯瞰しながら、「元の理／元はじまりの話」をこふきに位置づけるとき、明らかに元はじまりの話は、たんなる神話や創世説話とは一線を画する「話」であり、その内容の解釈を教理の全体像と切り離して論じることは難しいことがよく分かる。

とはいえ、「元の理」を「つとめ／たすけの理話」として限定的に解釈するだけでなく、その豊饒な意味世界を広く探求する視座も必要だろう。現存するこふきの写本に直接アクセスすることによって、それぞれにその深遠な神の言葉の沃野に足を踏み入れてもらいたいものである。そのためには、写真版を含む直筆原本に触れることが欠かせない。

この次はぜひ、『復元』誌の輪読やこふき本の講読といった研究会を企画してもらいたいものである。講演会とはまた違った、興味深い議論ができる場になるのではないだろうか。